



令和7年(2025年)3月13日

## テーマ展「井伊家と能一大名文化の精華<sup>せい か</sup>」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

### 記

#### 1 展覧会名称

テーマ展「井伊家と能一大名文化の精華」

#### 2 会 期

令和7年(2025年)3月20日(木・祝)～4月20日(日) \*会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

#### 3 会 場

彦根城博物館 展示室 1

#### 4 展示の趣旨

能は、世阿弥<sup>せあみ</sup>によって大成された室町時代の初期以来、武家の庇護の下に発展してきました。足利将軍家の愛顧を受け、豊臣秀吉の時代には武家が能を保護する体制が作られます。

これを引き継いだ徳川幕府は、能を幕府の式楽<sup>しきがく</sup>(公的儀式の際に行う楽舞<sup>がくぶ</sup>)と定めて保護し、五座<sup>かんぜ</sup>(観世<sup>こんばる</sup>、金春<sup>ほうしゅう</sup>、宝生<sup>こんごう</sup>、金剛<sup>きんごう</sup>、喜多<sup>きた</sup>)の役者を召し抱えました。幕府に倣い、全国の諸藩も盛んに能を催したことで、能は大名とその家臣に浸透し、武家の芸能として定着します。また、面<sup>おもて</sup>や装束をはじめとする能道具にも一層の洗練が加えられ、能はこの時代に現在見る形になりました。幕府や大名家の儀礼や祝儀を彩った能は、まさに大名文化の華といえるでしょう。

彦根藩井伊家においても、藩の儀式などで頻りに能が催されました。4代直興<sup>なおおき</sup>(1656～1717)による喜多流の役者の召し抱えが縁となり、以後、井伊家では喜多流が浸透します。特に能が盛んとなったのは、10代直幸<sup>なおひで</sup>(1731～89)、11代直中<sup>なおなか</sup>(1766～1831)の時代です。直幸は若い頃から喜多流宗家の弟子となり、謡<sup>うたい</sup>や舞<sup>まい</sup>などの修養につとめ、同じく能を愛好した直中も、喜多流を中心に多くの役者を召し抱えました。寛政12年(1800)には彦根城表御殿に能舞台が、その後、榎<sup>けやき</sup>御殿にも舞台が建てられ、井伊家の能は最盛期を迎え

ます。当主だけでなくその子弟や家臣も謡や鼓などを嗜み、井伊家の能の担い手となりました。さらに、12代直亮（1794～1850）も新たに役者を召し抱え、13代直弼（1815～60）は自ら能や狂言を作ったことが知られています。また近代には、15代直忠（1881～1946）が観世流の能を愛好し、生涯、能に打ち込みました。

本展は、古来、能が祝いごとの際に催されてきたことにちなみ、彦根城博物館のリニューアルオープンにあわせて開催する展覧会です。繊細な彫技を駆使した能面、染織技術の粋を凝らした華麗な能装束、そして井伊家伝来の古文書や絵図を通して、大名文化の精華である能と大名家との関わりを紹介します。

## 5 展示作品

参考作品を含め33件（別紙リストのとおり）

## 6 観覧料

一般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ( )内は30名以上の団体割引料金

\*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

## 7 関連事業

(1) 関連イベント ※本イベントの申し込みは終了しました。

名称：彦根城博物館リニューアルオープン記念イベント「体感！大名家の能舞台」

日時：令和7年(2025年)3月20日(木・祝)

①午前の部：午前10時～11時

②午後の部：午後2時～3時 \*いずれも同内容

会場：彦根城博物館 展示室1、能舞台

定員：各回10名 \*事前申し込み制・応募者多数の場合は抽選

参加料：無料 \*但し、参加には観覧料が必要

講師：茨木恵美（当館学芸員）

申し込み方法：彦根市電子申請サービスから申し込み（申込は1人1回まで）

申し込み期間：令和7年(2025年)2月21日(金)～3月5日(水)

その他：参加者には、記念品として能舞台クリアファイル1枚を進呈

(2) ギャラリートーク

日時：令和7年(2025年)3月22日(土) 午後2時～ \*30分程度

会場：彦根城博物館 展示室1

講師：茨木恵美（当館学芸員）

その他：観覧料が必要

### 問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：茨木恵美

(電話 0749-22-6100)

テーマ展「井伊家と能—大名文化の精華—」展示作品リスト

番号	指定	名称	作者	数量	時代	所蔵
<b>1 江戸幕府の儀式と能</b>						
1	重文	老中連署奉書 井伊直富宛		1通	江戸時代 (天明7年[1787]4月23日)	当館 (彦根藩井伊家文書)
2	重文	御謡初御作法書		1通	江戸時代	当館 (彦根藩井伊家文書)
3	重文	御謡初之席図		1状	江戸時代	当館 (彦根藩井伊家文書)
<b>2 彦根藩井伊家の能</b>						
4		井伊年譜 巻2		1冊	江戸時代中期	当館 (井伊家伝来典籍)
5	重文	側役日記		1冊	江戸時代 宝暦7年(1757)	当館 (彦根藩井伊家文書)
6	重文	側役日記		1冊	江戸時代 明和6年(1769)	当館 (彦根藩井伊家文書)
7	重文	広小路御屋敷留帳		1冊	江戸時代 天明元年(1781)	当館 (彦根藩井伊家文書)
8		黒漆塗櫻玉壺小鼓箱		1合	江戸時代	当館 (井伊家伝来資料)
参考		黒漆塗葵蒔絵小鼓胴		1口	江戸時代	当館 (松井耀加氏寄贈資料)
9		能管 銘誓願寺		1管	江戸時代	個人 (井伊家伝来資料)
10	重文	御城使寄合留帳		1冊	江戸時代 寛政11年(1799)	当館 (彦根藩井伊家文書)
11	重文	側役日記		1冊	江戸時代 文化9年(1812)	当館 (彦根藩井伊家文書)
12	重文	能役者由緒帳		1冊	江戸時代後期	当館 (彦根藩井伊家文書)
13		御謡初御囃子・御松能組		1状	江戸時代後期	個人 (宇津木三右衛門家文書)
14	重文	狂言草稿 安達女		1冊	江戸時代後期	当館 (彦根藩井伊家文書)
15		松竹図	狩野愛信 筆	6曲1双	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来資料)
<b>3 井伊家と喜多流</b>						
16		井伊年譜 巻9		1冊	江戸時代中期	彦根市立図書館
17		喜多流謡本	喜多親能 筆	30冊	江戸時代中期	当館 (井伊家伝来典籍)
18		喜多盈親書状 今村市之進・酒居三郎兵衛・今村平吾宛	喜多盈親 筆	1通	江戸時代 寛政12年(1800)閏4月29日	当館 (井伊家伝来典籍)
19		喜多健忘齋書状 河北勝兵衛宛	喜多健忘齋 (古能) 筆	1通	江戸時代 (文化8年[1811])正月21日	当館 (井伊家伝来典籍)
20		喜多流名寄		1状	江戸時代	当館 (井伊家伝来典籍)
21		喜多所持面之覚		1冊	江戸時代	当館 (井伊家伝来典籍)
参考		能面 小面 銘菜摘川	甫閑満猶 作	1面	江戸時代 享保19年(1743)	当館 (井伊家伝来資料)
<b>4 能を彩る面と装束</b>						
22		能面心覚記	井伊直亮 筆	1冊	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来典籍)
23	重文	次用能装束目録		1冊	江戸時代後期	当館 (彦根藩井伊家文書)
24		能装束 紅萌葱茶段流水に菊文様唐織		1領	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来資料)
25		能装束 浅葱地流水に鮎と水草文様掛素襖		1領	江戸時代 嘉永2年(1849)	当館 (井伊家伝来資料)
26		能装束 紺地毘沙門亀甲に獅子と雲板文様袷狩衣		1領	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来資料)
27		能面 獅子口		1面	室町時代	当館 (井伊家伝来資料)
28		能面 若女		1面	江戸時代前期	当館 (井伊家伝来資料)
29		能面 中将	是閑満吉 作	1面	桃山時代	当館 (井伊家伝来資料)
30		能面 笑尉		1面	江戸時代 宝永5年(1708)	当館 (井伊家伝来資料)
31		面筆筥		1合	江戸時代	当館 (井伊家伝来資料)

# 写真解説

## 1 側役日記 1冊 (作品リストNO. 6)

重要文化財

縦 28.9cm 横 20.5cm

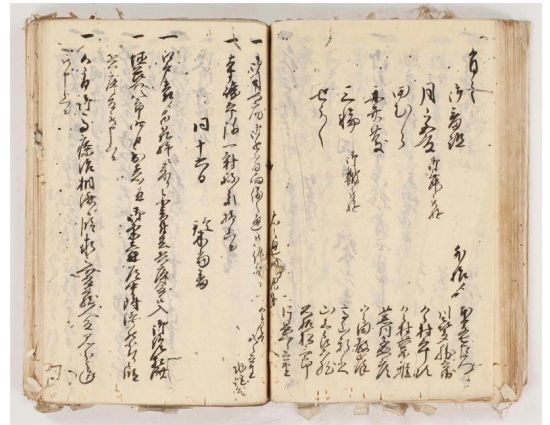
江戸時代 明和6年 (1769)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

側役日記は、藩主の側で日々の政務活動を補佐した側役が記した職務日誌。これは、井伊家10代直幸 (1731~89) が当主であった明和6年 (1769) 正月から閏4月までのもので、写真はその2月15日条です。

直幸は、世継ぎの時に喜多流宗家に弟子入りするなど、若い頃から能に強い関心を寄せていました。直幸が当主になると、井伊家の演能記録は急増します。直幸は、囃子 (面・装束を身に着けずに、主に曲の後半を演じる上演形式) などを度々催し、自らも演じました。

この側役日記によると、明和6年 (1769) 2月15日の晩に表御殿で催された囃子で、直幸は舞を舞い、小鼓を打ちました。また、地謡や囃子方 (楽器) として、直幸の側近で喜多流宗家の弟子である今村蘭雅、喜多流謡本の再編集に携わった蘭雅の息子の平次、庶子に謡などを教授した片岡一郎兵衛、荒川孟彦をはじめとする10人の藩士が参加しています。当主だけでなく藩士も能を嗜み、井伊家の能の担い手となっていたことが確認できる史料です。



側役日記 明和6年2月15日条

## 2 能役者由緒帳 1冊 (作品リストNO. 12)

重要文化財

縦 29.6cm 横 22.3cm

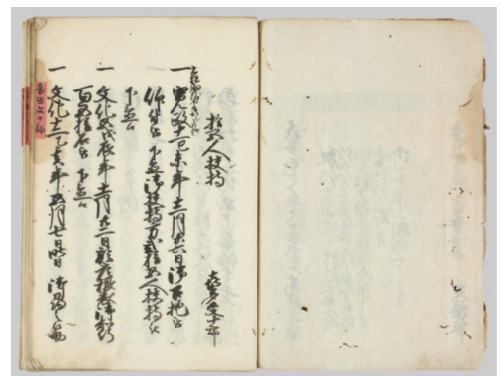
江戸時代後期

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

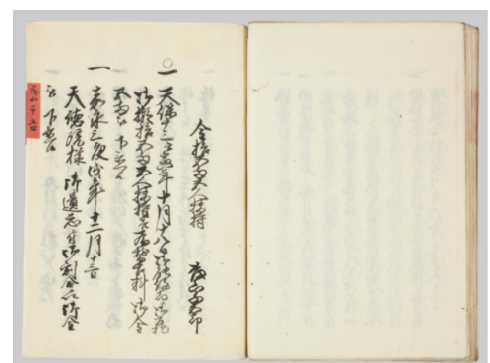
寛政11年 (1799) 12月26日、井伊家11代直中 (1766~1831) は、4代直興以降、初めて能役者を召し抱えました。この時お抱えとなったのは、喜多流宗家10世盈親の甥である、喜多織衛をはじめとする7名です。本史料は、以後、井伊家お抱えとなった役者の由緒や経歴を家ごとに記したものです。喜多織衛家を筆頭に、断絶、御暇となった家も含めて28家が記されており、嘉永年間 (1848~1854) には最も多い21家が雇用されていたことがわかります。

本書のなかには、12代直亮 (1794~1850) の時代、天保13年 (1842) 10月18日に、大蔵流の狂言役者の茂山千五郎が召し抱えとなったことも記されています。千五郎の召し抱えは幕末まで続き、13代直弼 (1815~1860) の時には、直弼が作ったとされる狂言〈安達女〉 (現行の〈鬼ヶ宿〉) の舞の型などを千五郎が定め、初演したと伝えられます。

これらお抱えの役者は、井伊家が催す能への出演は勿論、当主やその子弟への能の教授、町役者への指導、あるいは能道具の鑑定なども行いました。



能役者由緒帳 部分 (喜多織衛家)



能役者由緒帳 部分 (茂山千五郎家)



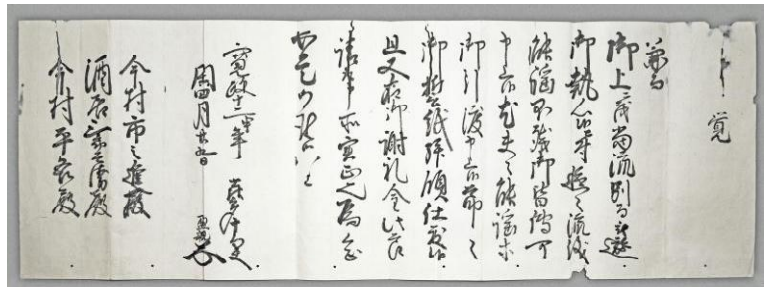
3 <sup>き た みつちかしよじょう</sup> 喜多盈親書状 今村市之進・酒居三郎兵衛・今村平吾宛 1通 (作品リストNO. 18)

縦 22.0cm 横 15.0cm

江戸時代 寛政12年(1800) 閏4月29日

当館蔵 (井伊家伝来典籍)

井伊家<sup>なおなか</sup>11代直中(1766~1831)は、歴代当主の中でも特に能を愛好した人物です。幼少より藩士から謡と鼓を習い、父である<sup>なおひで</sup>10代直幸の催す囃子で舞や鼓を披露するなど、能に親しみながら成長しました。当主となってからは、一層、能に熱中し、寛政11年(1799)には4代直興<sup>なおおき</sup>以降、初めて能役者を召し抱え、翌12年には彦根城表御殿に能舞台を建設しています。



この書状は、能舞台建設と同年の閏4月29日、喜多流宗家十世の盈親が側役の今村市之進らに宛てたものです。その内容は、直中の望みにより、追々、喜多流の「能謡」<sup>かいでん</sup>の皆伝を行うので、その伝授の際には誓詞をいただきたい、また伝授に関する謝礼金は受け取った、というものです。この書状により、直幸に続き直中も当主自ら喜多流宗家に入門したこと、さらには免許皆伝も受けていることが分かります。

4 <sup>のうしょうぞく</sup> 能装束 <sup>べにもえ ぎくろべにだんりゅうすい</sup> 紅萌葱黒紅段流水に菊文様唐織 <sup>きくもんようからおり</sup> 1領

(作品リストNO. 24)

丈 143.0cm 衿 72.6cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

<sup>からおり</sup>唐織は、能装束を代表する最も豪華な装束。主に女性役で使用します。地文様の上に、色系、金糸、銀糸をふんだんに用いて、草花や扇などの文様を刺繍のように浮き織りで表す、非常に手の込んだ装束です。

江戸時代、能装束は、能の庇護者である幕府や大名の好みと染織技術の発展を反映して、一層、豪華さを増していきました。17世紀後半には、金糸を全面に織り込むものも作られるようになります。

この唐織は、紅、萌黄、黒紅の地の全面に金糸で流水文を表し、その上に菊の折枝を散らしたものです。さまざまな色糸を用いた菊、金の流水、地色の紅や萌黄が相まって、実に華やかな印象を与えます。

現在、当館が所蔵する井伊家伝来の能面・能装束の大半は、15代直忠<sup>なおただ</sup>(1881~1947)が大正12年(1923)の関東大震災以降に新たに収集し、また作らせたものです。その中には大名家旧蔵の優品も多く含まれています。この唐織も直忠の収集品で、越前松平家の旧蔵品。大名家の能を彩った華麗な一領です。



5 <sup>のうしょうぞく</sup> 能装束 <sup>あさぎ</sup> 浅葱地 <sup>じりゅうすい</sup> 流水に <sup>ふな</sup> 鮎と <sup>みずくさ</sup> 水草文様 <sup>かけずお</sup> 掛素襖 1領 (作品リストNO.25)

丈 94.8cm 裱 92.5cm

江戸時代 <sup>かえい</sup> 嘉永2年 (1849)

当館蔵 (井伊家伝来資料)

<sup>かけずお</sup> 掛素襖は、武家の日常着や一般男性の平服として用いる麻地の能装束。

これは、<sup>あさぎ</sup> 浅葱の地色を水に見立て、<sup>ふな</sup> 流水に遊ぶ鮎と水草を配した涼しげな一領。文様の部分を染め残し、鮎や水草は描絵 (<sup>かきえ</sup> 墨や顔料、染料を使って文様を描く技法) で仕上げ、流水は染め残したままとして、ひっそりとした水の動きを表現しています。染の技法を活かした、巧みな意匠が目を引きます。

<sup>ほうしょう</sup> 宝生流の能が盛んであった加賀前田家の伝来品で、<sup>たとうがみ</sup> 畳紙の墨書から <sup>かえい</sup> 嘉永2年 (1849) に作られたことが分かります。制作年が判明する貴重な作例です。



6 <sup>のうめん</sup> 能面 <sup>ちゅうじょう</sup> 中将 <sup>ぜ かんよしみつ</sup> 是閑吉満 作 1面 (作品リストNO.29)

面長 20.2cm 面幅 13.6cm 面奥 7.4cm

桃山時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

<sup>ちゅうじょう</sup> 中将は、平安時代の歌人、<sup>ありわらのなりひら</sup> 在原業平の相貌を表現したとされる若い男の面。いかにも王朝の貴公子らしい気品と繊細さを感じさせ、眉間に寄せた2本の皺に一抹の哀愁が漂よいます。豊臣秀吉から「天下第一」を名乗ることを許された、桃山時代の名工、<sup>ぜ かん</sup> 是閑の作です。

この面は、鳥取藩池田家の旧蔵品です。面裏の <sup>めい</sup> 銘と附属の面袋の <sup>よしやす</sup> 墨書から、池田家の中でも特に能を愛好した3代吉泰 (1683~1739) が、<sup>げんぶん</sup> 元文3年 (1738) に入手したものであると分かります。

大名家は演能などのために多数の面を所蔵し、また収集していました。中でも本作のように、江戸時代以前の作行の優れた面が尊ばれました。

